【論文】

幼時体験を描く文学
――夏目漱石・中勘助・豊子愷――

Literature on Childhood: From a Comparative View on Natsume Soseki and Naka Kansuke, Feng Zikai

西　槇　偉

Isamu NISHIMAKI

要旨

Feng Zikai (1898-1975) was not only a painter but also a writer of modern China. His literary works have an intimate connection with foreign literature. This paper investigates the similarity of children's literature between Feng's essay and the literary works of Natsume Soseki and Naka Kansuke. In their works we can find the same tendency toward the cultural reformation in the modern period.

キーワード：夏目漱石　中勘助　豊子愷　永日小品　銀の匙　縁縁堂随筆

はじめに

子どものころの体験を描いた中勘助（一八八五―一九六五）の『銀の匙』[注1]は、日本近代文学の名作として、かなり高い評価を得ている。近年、名物教師橋本武（一九一二―二〇一三）が長年国語の教材に使用し、錚々たる人材を輩出したことでも話題になった。[注2]

一方、中国近現代の画家、随筆家豊子愷（ほうしがい）（一八九八―一九七五）も、絵画と文学でしばしば子どもを描いた。その代表作となった処女文集『縁縁堂随筆』（一九三一）にも子どもを描いた小品文がかなり含まれる。それらの作品を、夏目漱石の子どもを描いた小品文と比較し、豊子愷が漱石から影響を受けたのではないかと筆者は論を試みたことがある。[注3]たしかに、豊子愷は漱石の小品文に注目し、そこからみずからの創作に資するものを得たと思われる。しかし、世代の異なる漱石のほかにも、豊子愷が目を向けた日本近代の作家や作品はあったのではないか。漱石以降の日本文学と豊子愷の比較研究は行われてもよいであろう。

ここで、『銀の匙』を比較対象にえらんだ理由を述べておこう。まず、漱石につらなる作家として豊子愷は中勘助に興味をひかれた可能性がある。中は漱石に学び、その推挙をうけて、『銀の匙』を『朝日新聞』に連載し、文壇入りをした。はやくから漱石に関心のあった豊

子愷は、漱石の弟子にあたる中勘助の作品にアプローチしたとしても不思議ではない。しかも、『銀の匙』の刊行は一九二二年二月と推定され、同書には「夏目先生と私」という付録が収められている。[注4] ちょうど、日本遊学から帰国する前後で、豊子愷が日本の出版物に積極的にふれていた時期である。

また、一九二六年四月、岩波書店から『銀の匙』の新版が上梓されたことにも留意したい。この前後旺盛な漫画制作や文筆活動のなかにあった豊子愷は、上海内山書店の常連客となり、日本の出版物が彼の身近にあった。よって、初出の新聞連載は見られなかったとしても、単行本『銀の匙』は豊子愷にとって、同時代文学であり、子どもの生活を描いた作品に彼は興味を示したにちがいない。

とはいえ、本稿では豊子愷が中勘助の影響を受けたか否かの究明に重きをおくより、近代日中文学における子どもを描いた作品の比較をとおして、両者、ないし漱石も含めた三者の作品、思想の類似性、相違に照明をあてたい。漱石をも比較論にひきいれたのは、弟子の中勘助が師漱石の主題、表現技巧を継承した可能性があるからだ。

豊子愷初の随筆集『緣緣堂随筆』（計二〇編を収録、初刊は一九三一）と中勘助の『銀の匙』は、いずれも家族や親類、教わった教師などを描いた連作随筆ということができる。とくに、前者のなかでも、ごく初期の「憶児時（幼時の思い出）」（一九二七、三節構成）や「華瞻的日記（華瞻の日記）」（同年、二節構成）のあたりは、『銀の匙』との類似性はかなり顕著のようにみえる。したがって、中勘助は豊子愷を比較文学的に読むための新たな視点となりうる。

一　「喜いちゃん」と「お蕙ちゃん」と「徳菱」

漱石「柿」と中勘助『銀の匙』と豊子愷「華瞻的日記」

漱石の小品文「柿」をふまえ、豊子愷が「華瞻的日記」を制作したのではないか。両作品の比較を通して、筆者はそのような結論を下したことがある。この比較論は、両作品の重要な主題を引き出しえたと考えるが、『銀の匙』におけるヒロイン「お蕙ちゃん」をめぐる物語は、筆者にかつての比較の再考を促す。前編第四一節で、お蕙ちゃんが登場する。作者と思われる「私」との出会いのあたりをまず見てみよう。

その学期も終りにちかづいたころお隣へあらたに人がこしてきた。その家とは裏の畑を間にほんの杉垣ひとえをへだててるばかりで自由に往き来ができる。私が裏へいってこっそり様子をみてたら垣根のところへちょうど私ぐらいのお嬢さんがでてきたが、ついとむこうへかくれて杉のすきまからそっとこちらを窺ってるらしかった。暫くしてお嬢さんはまた出てきてちらりとひとを見たので私もちらりと見て、そして両方ともすましてよそをむいた。そんなことを何遍もやってるうちに私はお嬢さんがほっそりとしてどこか病身らしいのをみてなんとなく気にいってしまった。そのつぎに眼と眼があったときに彼方は心もち笑ってみせた。で、私もちよいと笑った。彼方は顔をそむけるようにしてくるりとかた足で廻った。こちらもくるりと廻る。むこうがぴょんととんだ。こちらもぴょんととぶ。ぴょんと跳ねればぴょんと跳ねる。そんなにしてぴょんぴょん跳ねあってるうちにいつか私は巴旦杏（はたんきょう）の蔭を、お嬢さんは垣根のそばをはなれてお互に話のできるくらい近よってた。が、そのとき

「お嬢様ごはんでございますよ」
とよばれたので
「はい」
と返事をしてさっさと駈けてってしまった。私も残りおしく家へ帰り急いで食事を済ませてまたいってみたらお嬢さんはもう先にきて待ってたらしく
「遊びましょう」
といつて人なつっこくよってきた。（下略）[注5]

お蕙ちゃんはお国さんに次いで、主人公の「私」とよく遊んだ幼馴染の女の子。二人が出会い、知り合うこの場面を、豊子愷の「華瞻的日記」の冒頭と比べるとどうだろうか。

隣り二三番地に住む鄭徳菱（ていとくりょう）は本当にいい子だ。今日、お母さんに抱っこされたぼくは、彼女がセメントの路面で竹馬に乗るところを見た。彼女がぼくににっこりし、その笑顔は一緒に遊ばないかという意味だとすぐわかった。ぼくもにっこりし、一緒に遊びたい気持ちを表した。ぼくはお母さんの胸から降り、彼女と竹馬に乗りにいった。二人で同じ竹馬に乗り、ぼくが曲がりたいといえば、彼女はいいよといい、ぼくがもう少し遠くに行きたいといえば、彼女も喜んで付いてきた。また、彼女が馬に草を少し食ませたいといえば、ぼくも喜んでとまり、彼女が馬を青木につないでおこうといえば、それも悪くないなとぼくは考えた。ぼくたちは志を同じくする友達だ。ちょうど夢中になって遊んでいるところへ、お母さんはぼくの手をひき、ご飯の時間だという。ぼくは、「いやだ」といった。お母さんは、「鄭徳菱もそろそろご飯よ」といった。果たして、鄭徳菱の兄が「徳菱」といいながら出てきて、彼女の手をひいて帰っていった。それで、ぼくはお母さんと一緒に戻るしかなかった。ぼくらはそれぞれの家に入るとき、彼女がぼくのほうを振り向き、ぼくも振り向いて彼女を見た。それから、二人は各自の家に入り、互いの姿は見えなくなった。[注6]

対句法を多用する文章表現の特色にしても、笑顔で心を通わせたり、食事によって遊戯を中断させられたりといった描写においても、共通点が多いといえよう。「徳菱」と「華瞻」が仲良く遊ぶこの場面を、「柿」における「喜いちゃん」と「与吉」の喧嘩のくだりと比べると、喧嘩の様子をきびきびとした対句の多用で描いたところは三者の共通点である。しかし、「柿」は三人称、作者の視点をとり、登場人物の心理にはあまり踏み込んでいないのにたいして、他の二編は一人称の主人公視点で心理描写を特色とする。それも『銀の匙』と「華瞻的日記」の類似点といえる。

男女二人の児童の交流を冒頭に掲げながら、「華瞻的日記」第一節はその後二人の物語に発展せずに、主人公と家族や理髪師との心の隔たりが描かれる。徳菱の物語は展開されなかった。とはいえ、それゆえに冒頭における幼友達二人の交流はいよいよ純粋なものに感じられるともいえる。[注7]

他方、喜いちゃんとお蕙ちゃんはヒロインとして物語を動かしていく。二つの物語をたどってみよう。「柿」は短い小品にかかわらず、起伏がある。喜いちゃんが裏の長屋の与吉と顔見知りで、時々話をするが、すぐ喧嘩になってしまう。喜いちゃんが落としたゴム毬を与吉が拾っていき、喜いちゃんの母は女中にとりに行かせるが、与吉の母親はそれには応じない。すると、三日後、喜いちゃんは赤い柿を手に与吉に仕返しをたくらむ。みごとに渋柿を与吉に食べさせ、喜いちゃんはしてやったりと家に戻ると、彼女の家から大きな笑い声が聞こえ

た。そこで話が終わる。

『銀の匙』のお蕙ちゃんのほうはというと、「私」と小学校で隣の席に座ることになる。しかし、「私」の成績が「びりっこけ」だと知るや、一緒に遊んでくれなくなる。それがショックで、「私」が奮起し、次の学期で二番の成績をとる。そこで、たまたまいじめられていたお蕙ちゃんを助け、二人はまた仲よくなる。しかし、お手玉をめぐって、二人がいさかいをすることもあった。このときはお蕙ちゃんが謝りにきたことで仲直りした。

そのうち、富公という転校生がクラスの餓鬼大将となり、お蕙ちゃんも彼と遊び、「私」の家に来なくなる。「私」は気も狂いそうになるけれども、やがてお蕙ちゃんが翻意してふたたび遊びに来る。その後、富公の仕返しがあったものの、桃の節句を一緒に祝ったお蕙ちゃんと「私」は「お雛様のようなご夫婦」と乳母にはやし立てられるほど、幼い恋の情緒が最高潮に達する。節句すぎてまもなく、引っ越すことになったお蕙ちゃんとの別れによって『銀の匙』前編が結ばれる。

こうした展開において、「柿」を意識して読むと、いくつかの共通点が浮かび上がってくる。

まず、「柿」は大工の息子と銀行の「御役人」――銀行員の娘との喧嘩を描くことにより、貧富の階層対立をきわだたせているが、お蕙ちゃんと富公のあいだにも同様の家庭事情がうかがえる。お蕙ちゃんの父親の職業はわからないが、彼女の母親が富公――「縫い箔を内職にする家」（着物にさまざまな箔を縫いつける飾り職の仕事を内職にする）の息子――に対する態度から、その家の経済状況は富公より恵まれているようだ。富公がひっこしてきて「私」よりも二歳年上のため力が強く口も達者。近所だから、三人で遊ぶようになるが、じきにお蕙ちゃんと仲良くなり、「私」はのけ者にされてしまう。学校でも、「私」はいじめられるようになる。

ところが、数日後、思い悩む「私」の家にお蕙ちゃんが突然現れる。また、「私」と遊ぶようになったお蕙ちゃんを翻意させたのは、なにか。彼女みずからその間の事情を語っている。

「富ちゃんとこなんかいっちゃいけないってお母様に叱られたから」

（中略）

「お母様に叱られて富ちゃんが大嫌いになったからまたあなたと仲よくしましょう」

という。私の心をなんといおうか。お蕙ちゃんはやっぱし私のものだった。そうとは知らず富公は一日待ちくたびれてたのだろう。明る日学校でこちらが見張ってるとも気づかずこっそりそばへよってなにかいいかけたがお蕙ちゃんは　もうあなたなんぞ嫌いだとけんもほろろの挨拶をした。お蕙ちゃんはお母様に叱られて以来しんから彼を軽蔑するらしかった。(注8)

お蕙ちゃんの口から、その母親のことば、すなわち大人の論理が現れたが、それは「柿」のお祖母さんが喜いちゃんに聞かせたことばと大差はない。「柿」では、あまり「上等」でない近所の子どもと遊んではいけないと、喜いちゃんは諭されている。

さて、「軽蔑」から対立が生まれ、喧嘩になる。この流れも両作品に共通する。ただ、「柿」では喜いちゃんと与吉が喧嘩をするのにたいして、『銀の匙』ではお蕙ちゃんではなく、「私」が富公の待ち伏せに「二尺ばかりの布袋竹」をもって向かっていく。「私」がまたお蕙ちゃんと仲よくなっていたので、「私」とお蕙ちゃんが同じ陣営で富公と戦ったことになる。それぞれの喧嘩の勝敗はといえば、「柿」では喜いちゃんが仕返しに成功し、彼女の家から笑い声が聞こえる。いっ

ぼうの「私」も、寄ってきた富公に「いきなり布袋竹で真向をくらわし」たら、富公はたちまち弱音を吐き、めそめそ泣き出してしまう。助太刀をしていた「寺の息子」をようやくのこと振り払い、からくも「私」が勝つ。「私」はもともと富公とはそりが合わない子どもだったが、お蕙ちゃんに与することで、大人の論理にそまっていく。

「泣き」と「笑い」

つぎに、おもちゃをめぐるいさかいや、「泣き」と「笑い」の表現モチーフも、喜いちゃんとお蕙ちゃんの物語から共通して見出せる。

「柿」では、崖上に住む喜いちゃんが遊んでいて下に落としたゴム毬を与吉が拾って返さないため、二人の対立は深まる。しかし、『銀の匙』では、お手玉は仲のよい二人のいさかいの原因となる。それは幼いお蕙ちゃんの気まぐれ、負け惜しみから生じたいさかいとはいえ、「私」のほうはずいぶん気をもんだ。翌日に、お蕙ちゃんが謝りに来て、二人はまた元の鞘におさまる。ここにも、背後にはお蕙ちゃんの親の指図があり、謝りに来たのは家で叱られたからであった。ゴム毬を返すように仕向けなかった与吉の母親とは対照的といえる。

「泣き」と「笑い」は「柿」のなかで効果的に用いられている。結末部の、喜いちゃんの家から聞こえる勝ち誇った笑い声、その伏線となるのは喜いちゃんが報告する長屋の様子を聞いて、「よしが大きな声を出して笑う。御母さんも、御祖母さんも面白そうに笑う。喜いちゃんは、こうして笑って貰うのが一番得意なのである」[注9]という中盤のあたりだろう。女中も一緒になり、家族で長屋の暮らしぶりを笑う。その笑いには軽蔑がこめられていることはいうまでもない。「笑い」にたいして、「泣き」は一度しか描かれない。与吉にゴム毬を返してもらえず、喜いちゃんは母親のところに来て泣きつくのだ。一度のみの使用とはいえ、「泣き」は「笑い」とは対照的な表現であり、作品でも人物の感情を表すには有効である。『永日小品』における「柿」につづく「火鉢」では、作者と思われる文筆家の日常が書かれ、そこでは二歳の子どもが始終泣いている。さらに、「柿」の前に置かれた「泥棒」をみると、二節構成の（上）では下女の泣き声が繰り返しふれられ、（下）では取り調べに来た巡査の「笑い」と、着物の帯をあまり知らない巡査に対する下女のにやにや笑いが描かれる。こちらも対比的で、ユーモアが感じられる。

子どもの日常には、感情の起伏があるのは珍しいことではないのかもしれない。しかし、お蕙ちゃんをめぐる物語には、「泣き」と「笑い」がコントラストをなしているようにみえる。笑顔をみせあい、出会ったのは第四一節、学級では成績が最下位と知って、「私」は次節ではわっと泣く。つづく第四三節ではいじめられたお蕙ちゃんがわっと泣き出した後、「私」にいたわられて、にっこり笑う。その後、お手玉でいさかいとなったとき、お蕙ちゃんが泣きながら、両袖で「私」をぶつのだが、翌日「さえざえしい笑顔」をみせて、お蕙ちゃんは謝りに来る（四五節）。第四六節でも、「とりよみ」の競争で、お蕙ちゃんが「くやし泣きに泣いたとみえて眼のまわりを赤くしている」ところが描かれる。

第四七と四八節は、「泣き」と「笑い」を対比させている。第四七節では、子どもたちが教壇に出て話をし、それを聴いてみなが笑う。「笑い」の表現は、それぞれ前半、中盤、終盤に配置されている。この節の特色が「笑い」とすれば、次節は「泣き」を特徴にしている。

第四八節では、冬の夜遊びに来たお蕙ちゃんが火鉢にあたっていると、「私」がその髪をいじり、それで彼女がかんしゃくを起こして泣き出すことがよくあったという回想に始まり、「堪忍して」と「私」がいってもなかなかきかず、ひとしきりに泣いて、ようやく「淋しい笑顔をみせて」機嫌を直す。そのようなお蕙ちゃんの泣き癖が紹介さ

れる。直後の一段は泣き方をよく観察した秀逸な描写である。

お蕙ちゃんは泣きまねが上手だった。つまらないことを二言三言いいあううちに急にぷりぷりしたと思うといきなりひとの膝に顔をかくしておいおいと泣く。私はその重たい温(ぬく)みを感じながら、簪をぬいてみたり、くすぐってみたり、手をかえ品をかえて機嫌をなおそうとすればなおなお泣きたてるのでこちらに咎(とが)はないと思いながらも一所懸命にわびる。と、さんざてこずらしておいてから不意に顔をあげべろっと舌をだして　ああいい気味だ　というように得意に笑いこける。すべっこい細い舌だった。私はあまりたびたびその手をくったためしまいにはほん泣きかうそ泣きかを額に出る癇癪筋のあるなしで見わけることをおぼえた。(注10)

このように、お蕙ちゃんにとって、泣くことは「私」を翻弄する手段でもあった。「私」のほうは、泣くことにより悲しみ以外の感情を表すこともできることを、理解するようになっていく。それにしても、「泣き」と「笑い」はお蕙ちゃんの表情を豊かにしているといえるのではないだろうか。

一方、豊子愷の「華瞻的日記」も「泣き」と「笑い」を意識的に対比させて用いている。そのことについては、すでに詳細な分析を試みたので、ここではくりかえさない。(注11) しかしながら、「柿」それから『銀の匙』におけるお蕙ちゃんの物語と、「華瞻的日記」には、階層対立のテーマや「泣き」「笑い」といった表現モチーフが共通していることが認められるだろう。

二　「子供らしい驚嘆」の目

家での養蚕

二二節からなる『銀の匙』後編は、前編と同様節ごとの表題はない。内容をみると、「大好きな中沢先生」に始まり、「気の合わない丑田先生」「自由の天地をもつ蟹本さん」「兄との釣り」「家での養蚕」「老僧にへちまの絵を描いてもらう」「伯母との再会」「知人の姉との出会いと別れ」など、展開は前編に比べて速く感じられる。「兄との釣り」と「家での養蚕」のあたりは、豊子愷の「憶児時」を思わせる。「憶児時」は「華瞻的日記」とほぼ同じ時期に創作され、同じ号の『小説月報』に発表された。それは三節構成で、順に「祖母が健在のころの家での養蚕」「父が蟹を食べることを中心とする一家団らん」「幼友達との釣り」が描かれている。このうち、とくに第一節が『銀の匙』後編第八節と類似しているようにみえる。

『銀の匙』後編で語られる養蚕のエピソードは次のように始まる。

家のまわりには切りのこした桑の木があったので慰みかたがた子供たちの実地教育にもなるという父の考から近処ですこしばかりの種をわけてもらって蚕をかったことがあった。母や伯母は面倒だ面倒だというものの実はいくらか得意で、もう大丈夫二度とくることのない昔の労苦を思いだして楽しみながらいそいそと桑をきざんでやる。はじめはただ葉のしたにかくれてるのが日に日に大きくなり坊主頭をふりたててはじからくいかいてゆく。私も小さな羊羹の函に五六匹いれてもらって、伯母さんがお蚕様はもとお姫様だったなぞと教えたもので寝るときにはちゃんと御機嫌ようをし、朝はまたおはようをして、留守の世話をよくよく頼んで学校へゆく。さて帰ってくれば姉は手拭をかぶって前垂の両端

を帯にはさみ、私は笊をかかえて桑つみにでかける。そうして指の先を黒くしながら手のとどくかぎりうまそうなのをよってつみっこをする。冷い唇からはきだす糸の美しいつやが仇となって遠い昔から人の手にのみ育てられたこの虫は自ら食を求めようとはせず蓆のうえに頭をならべておとなしく桑の葉のふりまかれるのを待ってるのを伯母さんは

「お姫様だったげなでこのお行儀のええことはの」

とさもほんとらしくいう。（下略）[注12]

中勘助は明治一八年神田の東松下町に生まれ、五歳のときに小石川の小日向水道町に転居している。小日向水道町は武家屋敷があった地域で、維新後没落し、住人がいなくなったところも多い。東京府は明治二年にお触れを出し、桑や茶を植えることを奨励したという。「家のまわりに切りのこした桑の木があった」のはそのためであろう。作中の「私」も神田から小石川の高台にある、杉垣に囲まれた古い家に引っ越している（前編、十）。

養蚕は富国強兵策を推進する当時の重要な産業で、農家にとって収入源となる仕事だったろう。しかし、「私」の家では営利目的でなく「慰みかたがた子供たちの実地教育」のためということもあり、女性たちは楽しみながら養蚕に従事できたようだ。「私」にとってもそれは労働というより遊戯に近く、熱心にかかわった。「私」は小箱に入れた蚕の世話をし、桑つみも手伝う。「私」の指導係となったのは伯母や姉で、姉は「私」を連れて桑つみにでかけ、伯母から蚕がもとは「お姫様」だったと「私」は教わる。可愛らしいお姫様の成長を見守るが、白い繭となったところで、鍋で煮られることになり、「私」の「お姫様の夢」が覚めるのだ。

「不可思議の謎の環」と「子供らしい驚嘆」の目

自分の箱にできた繭を「私」は守り通し、それらが羽化して蝶になり卵を産む。その様子をみて、「私」がつぎのような感慨をもよおす。

蚕が老いて繭になり、繭がほどけて蝶になり、蝶が卵をうむのをみて私の智識は完成した。それはまことに不可思議の謎の環であった。私は常にかような子供らしい驚嘆をもって自分の周囲を眺めたいと思う。人びとは多くのことを見馴れるにつけただそれが見馴れたことであるというばかりにそのままに見すごしてしまうのであるけれども、思えば年ごとの春に萌えだす木の芽は年ごとにあらたに我らを驚かすべきであったであろう、それはもし知らないというならば、我我はこの小さな繭につつまれたほどのわずかのことすらも知らないのであるゆえに。[注13]

養蚕を「実地教育」の手段として、「私」の父が教えようとしたのはなんだろうか。テクストにははっきりと書かれていないが、養蚕業の一端を子どもに見せようとしたのか、あるいは労働によって収穫を得るという功利主義を子どもに植えつけようとしたのかもしれない。ところが、「私」が発見したのは「不可思議の謎の環」であった。それは命のサイクルにほかならないだろう。今のことばで「命の教育」といってもよく、それに大人たちはあまり理解を示さなかった。ただ伯母が、捨てられた蚕のうえに傘をさして立ち尽くす「私」を見つけて、なだめてくれたのみである。

自然のなかで生きる命の神秘にふれた「私」は、ひとつの見方に開眼する。引用文後半の「私」は成長して大人になった「私」と思われ、幼き日を振り返っている。かつての子どもの目を再評価し、ものごとを見慣れることで見すごさずに、つねに驚きと感動を覚える見方を失

うまいと彼は述べている。このあたりに幼時体験を丁寧につづった『銀の匙』の中心思想があるといわれる。[注14]

「私」が守り通した種から孵った蚕の運命が、第八節後半に記されている。桑の木も少なくなり、人手もないため、それだけの蚕を飼うのは難しい。そうした効率主義に支配された大人たちは、こっそりと蚕の半分ほどを裏の畑に捨ててしまう。蚕はすでに「お姫様と兄弟」となっており、「私」が泣いて反発し、学校を早退して桑の葉をつんでやる。にもかかわらず、蚕は土にまみれて死んでゆく。悲しみにくれる「私」に「仏性の伯母」が同情し、「お念仏をくりかえしながら」、「私」を連れ帰る。それから、「私」は蚕の墓をつくるのである。そのように完結するエピソードは、「私」という子どもの目を通して、長い歴史のある養蚕という行為の残酷性を浮き彫りにしている。その残酷性を、「お念仏」やお墓をつくることで乗り越えようとしたようにみえる。

豊子愷が描く幼時の養蚕

さて、豊子愷「憶児時」における養蚕をみることにしよう。

三節構成の第一節冒頭部分を以下に掲げる。

わたしには忘れられない幼時の思い出が、三つある。

一つ目は養蚕である。わたしが五、六歳の頃、祖母がまだ健在であった。祖母の性格はおおらかで、彼女は生活を楽しむことをよく知っていた。折々の節句を大切にするのはいうまでもなく、養蚕も毎年盛大に行うのである。実を言うと、それはわたしが大人になってからわかったことだが、祖母の養蚕はお金をもうけるためだけではなかった。桑の葉が高い年になると、よく損をしたものだ。しかし、彼女が暮春のこの行事をこよなく愛し、それで毎年盛大に行ったのである。わたしに嬉しかったのは、まず蚕が床に下りてくるときで、三間の広さのわが家のホールの床全体が蚕に占拠される。通行のためまたは餌やりのために、縦横に板がかけられた。蔣五伯（しょうごはく）は天秤棒をかついで、畑へ葉を摘みに出かけると、わたしは姉たちと一緒に彼について桑の実を食べに行った。蚕が床に下りる頃、桑の実は紫色になり、甘くなるのだ。それは山桃よりずっと美味しい。わたしたちが好きなだけ食べてから、大きな桑の葉で茶碗の形に作り、実をいっぱい摘んで蔣五伯に連れられ家に帰る。蔣五伯が蚕に餌をやり、わたしは通路の板の間を渡り歩いて楽しんだ。よく床に転んでは、蚕をたくさん潰したものである。祖母の掛け声で、蔣五伯がやってきて、わたしを抱き起こし、通路で遊んではいけないよという。でも、床にかけられた板は碁盤目の町並みのようで、歩いていて怖さも感じず、たいそうに面白く、それは本当に年一度の得がたい楽しみであった。だから、祖母に叱られようが、わたしは毎日その上を歩いて遊んだ。[注15]

こちらでも「私」という一人称の主人公が幼時体験を語る。『銀の匙』同様、ここの「私」も作者自身とみなすことができる。記述に虚構が混じることも同じい。行文の流れを先の『銀の匙』後編第八節冒頭と比べると、養蚕の目的、女性たちが楽しみとして従事していること、幼い「私」が家人と一緒にお手伝いをすることなど、共通項はいくつもある。双方とも季節の風物で、お祭りにみられる非日常性が彼らの養蚕体験にみられる。蚕を「お姫様と兄弟」とみなす親近感は「憶児時」にはないものの、両者とも感覚表現を重視しているようにみえる。『銀の匙』では「指の先を黒くしながら」桑つみをし、「憶児時」では紫色に熟した桑の実を「私」が好んだ。味覚表現が「憶児時」

のこの第一節もふくめ、全体の特色となっている。

『銀の匙』では繭を鍋で煮て、「黄色く濡れた糸をくるくると枠にま」き、そこで出てきたさなぎを兄が「餌箱にいれて釣り堀へとんでゆく」と描いており、糸紡ぎの工程は略述されている。それにたいして、「憶児時」ではこの工程の描写はより詳しい。糸紡ぎを手伝う七娘娘という人物が登場し、糸紡ぎでできたさなぎは料理すると美味しいよと彼女から聞かされるが、「私」はそれを食べようとはしなかった。多くの人が立ち働き、彼らのために用意された果物やお菓子を「私」はお腹いっぱい食べ、それも「私」の楽しみのひとつであった。蓖蚕が終わると、家がまた元とおりになり、それも「私」には珍しくて面白かった。そうした、子どものころの蓖蚕を回想しながら、「私」はつぎのような感懐を抱く。

今わたしが子どもの頃を回想し、本当に心をひかれてやまないのだ。祖母、蔣五伯、七娘娘や姉たちはみな童話の中の人物のようである。しかも、わたしから見れば、彼らがあの頃演じていた芝居の主人公はほかでもなくわたしであった。それはなんと甘美な思い出だろうか。ただ、芝居の題材について、今考えると、残念のように思う。蚕を飼い、糸を紡ぐのは、生計のためによいこととはいえ、それはもとは何千何万もの生き物を殺戮することにほかならない。蚕を飼うというのは、実は犯人を生かしておくのと同様である。糸を紡ぐというのは、実は彼らを焼き殺しの刑罰に処するも同然ではないだろうか。当時の喜びと幸せは、生霊の虐殺を背景にしていたとは。それがわかっていたなら、わたしはみなと一緒に桑の実や枇杷、お菓子を絶対食べなかったと思う。最近、『西青散記』を読み、その中には次のような仙人の句を見つけた。「自織藕絲衫子嫩、可憐辛苦赦春蚕（みずから　藕絲を織り　衫子　嫩く、辛苦を憐れみ　春蚕を赦すべし）」。人間も蓮根から糸を紡ぐ方法を発明し、蚕の命を助けることはできないだろうか。

わたしが七歳の時、祖母は他界した。それより家では蚕を飼わなくなった。間もなく、父も姉も弟も相次ぎなくなり、家運が傾き、わたしの幸せな幼年時代は終った。したがって、わたしはいつまでもこの思い出に心惹かれるとともに、それによっていつまでも罪の意識にさいなまれることにもなったのである。(注16)

『銀の匙』後編第八節に比べ、成人した「私」の語りは分量がやや長い。前者は生命のサイクルに目を開かれ、また子どもの目を評価したのにたいして、後者は甘美な思い出にひそむ「生霊の虐殺」への反省を表白している。殺生の罪にさいなまれる「憶児時」の「私」と、「子供らしい驚嘆」を失わずに周囲を眺めたい『銀の匙』の「私」との間に少し開きがあろう。とはいえ、蚕の死を悼む「私」と伯母は殺生の残酷さに心痛しているのだと思えば、「憶児時」後半の「私」とあまり隔たりがないようにも思える。前者は幼くして大人の冷酷、蚕の無念の死に悲嘆するが、後者の「私」は成人してようやくそれに気がついたわけである。

それから、『銀の匙』全編の主題にかかわる「子どもの目」について、「憶児時」には類似した記述はない。しかし、この小品より一か月遅れて発表された「子どもから得た啓示」は、まさに「子どもの目」を称讃するものにほかならない。好きなことはなにかと問われて、戦災からの「避難」と子どもが答えるところより語り起こされるこの小品文の第一節は、大人と子どもの見方の違いを指摘し、さいごに

ああ、今晩、わたしは子どもに啓示を受けた。彼は世間の物事

に絡む因果の網を撤去し、物事本来の姿を見極めることができる。彼こそ創造者であり、あらゆるものに生命を付与する。彼らこそ「芸術」王国の主人なのだ。そうだ、わたしは彼に学ばなければならないのだ。(注17)

と、しめくくる。「物事本来の姿を見極める」目は、すなわち「子供らしい驚嘆」を失わない目ではないだろうか。同作品の第二節は、真率な子どもの姿を大人の虚偽と対比させており、「子どもの目」を失うまいとする『銀の匙』の「私」の主張と重なるものといってよい。

さいごに

夏目漱石・中勘助・豊子愷

三節構成の「憶児時」は、第一節の養蚕に続いて、二節では「私」の父親が蟹を食べることを中心とした一家団らん、三節では「私」と幼友達との釣りが描かれる。三節は同じように、子供のころの家庭生活における懐かしい場面を回想しては、現在の目から蚕、蟹、魚を殺した罪を悔やむ。先に見た『銀の匙』後編第八節と比較すると、主題に共通点が認められるものの、表現がやや観念的といえる。つまり、『銀の匙』は葛藤する主人公の姿を具体的な場面の描写により浮かびあがらせているところに特色がある。一方、豊子愷の作品は観念先行といえるかもしれない。「憶児時」はすなわち「幼時の殺生の罪」というテーマの作品化であり、その際養蚕、蟹食、魚釣りが素材に選ばれたというわけだ。文学のテーマと素材の選択において、『銀の匙』に感化を受けた可能性があるといえる。しかし、現時点影響関係を裏付ける充分な根拠は見当たらず、今後のさらなる比較検討に期待したい。

影響関係の検証はできないとしても、日本と中国の子どもを表象した近代文学作品にさまざまな類似点が浮かび上がり、比較文化論へのヒントを与えてくれる。養蚕という共通した文化の存在はもちろん、仏教につよい親近感を抱く二人の作家の思想などについても掘り下げることができよう。

豊子愷と中勘助の二人は初期の文学創作において、子どものころの体験を素材としたことは共通している。そのことの意味も日中近代文学史のなかで改めて測定する必要があろう。ここで、文学作品を創作し始めたころの豊子愷について整理をしてみたい。一九二六年に身辺の出来事を随筆風に記した小説「法味」を発表したが、「憶児時」「華瞻的日記」をはじめ一九二七年以降の連作小品文は、後に小品文の名手といわれた豊子愷の処女作品群と位置づけできる。これらは一九三一年『緣緣堂随筆』として刊行され、作者初の文集となる。本書には、計二〇編が収められ、子どもに関するものは五編にのぼる。そのうちの三編が複数節からなっており、そのほかにも子どもに言及する二編を加えると、幼時体験を含めた子ども小品はかなりのウェートを占めることがわかる。

これらの作品の創作時期は、一九二七年から二九年にわたるが、二七年に集中し四編書かれている。この年、豊子愷は二九歳、すでに画集を刊行して、文学結社「文学研究会」の機関誌『小説月報』の挿絵と装丁も手がけていた。作品を発表しやすい立場にあった彼が、真っ先に『小説月報』に載せたのは、「憶児時」「華瞻的日記」の二編計五節構成の子ども小品の連作であった。彼の初期絵画を見ても、子どもモチーフは少なくない。やや遅れて小品文にも表現されるようになったのは偶然ではないだろう。

さらに一九二七年という時期に注目すると、この前後、豊子愷自身思想の転換を経験していた。彼は西洋美術と音楽の中国での啓蒙者で

ある李叔同（一八八〇―一九四二）に私淑し、美術修業のため日本留学に赴いたこともある。帰国後、西洋美術と音楽の教育や関連の執筆活動に携わり、西洋文化の移入者として活躍していた。そんな彼が一九二〇年代半ばすぎに中国伝統文化の見直しを行っていたのである。この時期に稿が成り、一九三〇年に発表された「中国美術在現代芸術上的勝利（現代芸術における中国美術の優位）」が当時彼の思想の揺れを、如実に示している。[注18]

『銀の匙』には明治以降の文明開化、合理主義の考え方に対する反発がみられ、その姿勢は永井荷風、泉鏡花、谷崎潤一郎、夏目漱石にも共通すると、十川信介氏が論じておられる。[注19]豊子愷が漱石に心ひかれたのは、まさに漱石にみられるそうした姿勢であり、同じように彼は『銀の匙』に共感する素質をもっていた。一九二七年の小品文「天の文学」で豊子愷は、精密な天文学や数学に対して、明らかな嫌悪感を示し、中国古典文学の世界への愛着を現しており、直感的で非合理的な世界観への憧れを吐露しているのである。[注20]

では、中勘助と漱石はどうであろうか。『銀の匙』を漱石が評価したのは、「柿」などの小品文に通じるものをそこに見出したからだといえるのではないか。掲載先の紹介を頼み、『銀の匙』の創作ははじめから漱石を意識していたのであり、漱石の子どもを描いた小品文から中勘助が影響を受けたとしても不思議ではない。後に漱石の『道草』（一九一五）において、逆に『銀の匙』の影が見受けられるというから、両者のかかわりは興味深い。[注21]

漱石よりも一世代後の中勘助、その視点から師の漱石、あるいは漱石をこよなく愛した中国作家の豊子愷を照射する試みがもう少しなされてもよいのではないだろうか。幼時体験を描く日中近代の文学のかかわりが、そこからみえてくると期待される。

注

（1）『銀の匙』は大正二年四月八日から六月四日まで五七回、大正四年四月十七日から六月二日にかけて四七回ににわたり、『東京朝日新聞』に連載された。詳細な書誌情報は『中勘助全集』第一巻、岩波書店、一九八九年九月を参照されたい。

（2）橋本武『〈銀の匙〉の国語授業』岩波ジュニア新書、岩波書店、二〇一二年三月や、伊藤氏貴『エチ先生と『銀の匙』の子どもたち　奇跡の教室　伝説の灘校国語教師・橋本武の流儀』小学館文庫、二〇一二年十月、中勘助著・橋本武案内『銀の匙』小学館文庫、二〇一二年十月などの書籍が刊行された。

（3）拙著『響きあうテキスト　豊子愷と漱石、ハーン』研文出版、二〇一一年五月を参照。

（4）『銀の匙』岩波書店による初刊の奥付には「大正十年十二月十日」とあるが、前書きの刊記は「大正十一年一月十日」となっており、奥付と異なる。版元に残る印税支払い記録は「大正十一年二月二十七日」であることから、公刊は十一年二月と推定される。『中勘助全集』第一巻、岩波書店、一九八九年九月「後記」による。

（5）前掲『中勘助全集』第一巻、八四―八五頁。引用にさいして、常用の仮名遣いに改めた。以下同。

（6）豊子愷「華瞻的日記」『小説月報』第一八巻六号、上海商務印書館、一九二七年六月一〇日。和訳は拙訳によるが、吉川幸次郎訳『縁縁堂随筆』（豊子愷著、創元社、一九四〇年四月）所収「華瞻の日記」のほか、拙訳「豊子愷『縁縁堂随筆』その二」（『文学部論叢』第一〇三号、熊本大学文学部発行、二〇一二年三月）も参照されたい。

（7）読者は第一節から読み始めるであろうが、雑誌掲載時節ごとの

末尾付記をみると、創作順は逆である。第一節は「一九二七年梅雨時節」、第二節は「一九二七年初夏」の制作。

(8) 前掲『中勘助全集』第一巻、一〇八頁。

(9) 夏目漱石「柿」『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』明治四二年(一九〇九)一月一七日、「永日小品」欄所載、ここでは『漱石全集』第一二巻、岩波書店、一九九四年一二月により、一四四頁。引用にさいし、ルビを省き、常用の仮名遣いに改めた。

(10) 前掲『中勘助全集』第一巻、一〇三頁。

(11) 前掲拙著『響きあうテキスト』第三章「心の隔たり」を参照。

(12) 前掲『中勘助全集』第一巻、一三六―三七頁。

(13) 前掲『中勘助全集』第一巻、一三八頁。

(14) 十川信介『「銀の匙」を読む』岩波セミナーブックス、一九九三年二月、一五二頁。

(15) 豊子愷「憶児時」一、『小説月報』第一八巻六号、一九二七年六月十日、「小品」欄、一頁。原文は中文、引用は拙訳を用いた。前掲拙訳「豊子愷『緣緣堂随筆』その二」に全文収録。

(16) 前掲『小説月報』二頁。

(17) 豊子愷「子どもから得た啓示」原題は「従孩子得到的啓示」『小説月報』第一八巻七号、一九二七年七月十日、拙訳「豊子愷『緣緣堂随筆』その一」(『文学部論叢』第一〇二号、文学部熊本大学発行、二〇一一年三月)には全文収録。

(18) 拙著『中国文人画家の近代　豊子愷の西洋美術受容と日本』(思文閣出版、二〇〇五年四月)第八章「豊子愷の中国美術優位論」や稲賀繁美著『絵画の臨界　近代東アジア美術史の桎梏と命運』(名古屋大学出版会、二〇一四年一月)第Ⅲ部第四章「豊子愷の東洋画優位論とモダニズム」などを参照。

(19) 前掲『「銀の匙」を読む』第二講「神田と小石川」を参照。

(20) 豊子愷「天の文学」原題は「天的文学」『小説月報』第一八巻七号、一九二七年七月十日、前掲拙訳「豊子愷『緣緣堂随筆』その一」に収録。

(21) 両者の作品を対比させる読みや、影響関係についての言及はかなりある。平岡敏夫「「銀の匙」――漱石をめぐる幻想」(『国文学　解釈と教材の研究』第三三巻一四号、学燈社、一九八八年十二月)や、前掲『「銀の匙」を読む』を参照。前者では『銀の匙』と『坊ちゃん』を対比し、後者では『道草』と『銀の匙』のかかわりなどを指摘している。